「教育臨床総合研究16　2017研究」

「開放制」教員養成における学生支援の現状と課題
― 「水曜倶楽部」３年間の取組みを中心に ―

Present Conditions and Problems of Student Support under the 'Open System' of Teacher Training
― Focusing on the Activities of the 'Suiyo-club' during Three Years ―

山　根　伸　子*　　木　下　公　明*
Nobuko YAMANE　　Kimiaki KINOSHITA
三　島　修　治**　　粟　野　道　夫*
Shuji MISHIMA　　Michio AWANO
塩　津　英　樹*
Hideki SHIOZU

要　旨

平成26年７月に教職課程を履修する他学部の学生（開放制課程）をサポートする目的で「教員を目指す学生を応援するための時間・スペースである「水曜倶楽部」を教師教育研究センター内に開設してから３年が経過した。本稿はこの３年間の活動を通じて，４年生の意識調査や学校訪問のアンケート結果等から「水曜倶楽部」に求められる役割及び成果と課題について明らかにした。

〔キーワード〕　開放制　学生支援　教員養成

Ⅰ　「水曜倶楽部」の開設と目的

平成26年７月に教員を目指す学生を応援するための時間・スペースである「水曜倶楽部」を当センター内に開設してから３年が経過した。「水曜倶楽部」の主な目的は教育学部以外の他学部（法文学部，総合理工学部，生物資源科学部）の教職志望者（以下，他学部生と略記）の教職に関する全般的なサポートであり，教育学部と比較して教職課程のための勉強に取り組む時間が不足しがちな他学部生が，仲間と関わりながら教職を目指すための時間を作るための様々な活動を行うことである。

*島根大学教育学部附属教師教育研究センター
**島根大学大学院教育学研究科実践開発専攻

Ⅱ　島根大学の開放制課程における教職志望学生数の推移

本学における教職を志望する他学部生は，理系の学生が約８割を占めており，その中でも総合理工学部の学生が一番多いのが特徴である。

例年，１年次には350名近い教職志望者がいるが，学年が進むにつれ減少し４年次には110名程度に減少している。ここ２，３年はますます減少傾向にあり，特に総合理工学部の減少が著しい（図１）。このように教職志望の学生が年々減少している背景には，中学校・高等学校の教員採用試験倍率の高さや教職以外の民間企業の大卒就職率の向上，平成25年度からの教職実践演習導入による授業数の増加や教職ポートフォリオ作成等の負担などが各種要因として考えられる。このため，真剣に教職を志望する学生の比率が高くなったと考えられる一方，優れた人材を確保するチャンスを逸してしまうことも考えられる。開放制課程の教員養成の点からも，より優れた人材を確保し，養成していくための対策が必要となってきている。

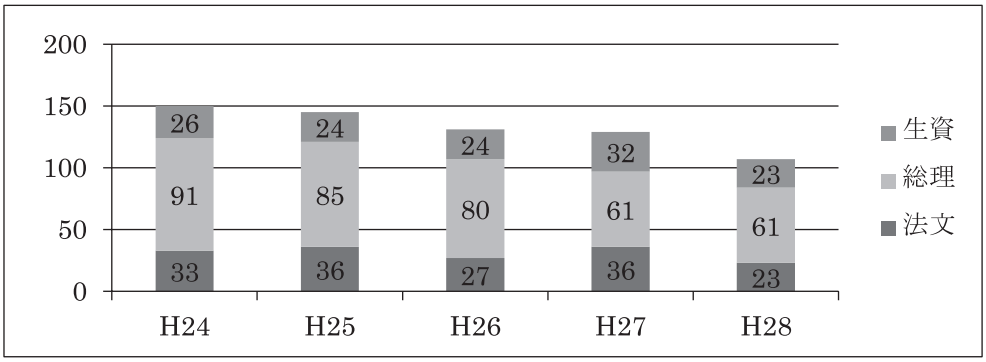


図１　教育実習履修者数の推移（平成24年～平成28年度）（人）

Ⅲ　島根大学の開放制教員養成における理念と目的

ではより優れた人材を確保していくために，本学における開放制課程では，教員養成についてどのような各学部の理念・目的が定められているのであろうか。ここでは「島根大学教員養成の理念・目的」を確認する。

まず法文学部では，「法文学部は，山陰地域に立脚した先端的な地域研究を実践するとともに，国際性豊かな教育をも展開し，地域から世界を思考し，世界から地域を思考しうる人材の育成につとめてきた。「法経学科」「社会文化学科」「言語文化学科」の３学科で構成され，それぞれの学科において専門的な教育を体系的に習得すると同時に，学科をこえた単位の取得を可能とする学際的なカリキュラム編成を実施している。中等学校・高等学校の教員養成にあっては，「社会」「国語」「英語」「福祉」の専門知識の教授のみならず，フィールドワーク授業，アクティブラーニング型授業を数多く配置し，それらを統合，実践しうるための力の養成にもつとめている。」とある。

次に総合理工学部では，「革新的科学技術が次々と生み出され，それに伴って社会も急速に変化しているような今日の状況の中で生き，新たな時代を切り拓いていく若者には，広い視野と柔軟な適応力に裏付けられた創造性を持つことが求められる。本学部では，このような能力を有し，独自の発想とグローバルな視点を備えた人材の育成を目指す。なお，総合理工学部の

各学科の入学者から選抜した学生とＡＯ入試により選抜した学生からなる「理工特別コース」は，科学技術の発展をリードする優秀な研究者・技術者，将来の科学技術を担う人材を育てる有能な教育者を育成することを目的としている。」とある。

生物資源科学部では，「生物，生命，生活を包含するライフを総合的に科学する学部」を理念として，基礎科学分野から応用科学分野までを包含する学際的な教育を実践してきた。（中略）教育においても，従来の学部理念をより徹底し，生物，物理，化学，地学等の基礎科目を偏りなく修得しつつ，さらにそれらを基盤として環境，生産等のより複合的な問題に対処しうる人材の養成が急務となってきた。（中略）さらに，中等教育の教員養成についても，特に基礎教育を強化したカリキュラム編成により，「理科」及び「農業」の科目において，物理，化学，生物，地学並びに農学に関するそれぞれの専門知識の教授のみならず，それらを統合，実践し，環境や生産等，複合的な教育にも対処しうる人材を育成する。」とある。

なお，本稿で論じている他学部生には含まれていないが，養護教諭を養成する医学部では，「子ども達が社会・学校・家庭での生活における自らの健康課題を見つけ，それに対処していくことができる豊かな心と身体を育むことができるよう，保健・医療と連携・協働しながら対応することのできる養護教諭を育成します。また，変化し続ける教育現場や医療に対応していくために，生涯にわたり研究的な態度で自己研鑽していくことのできる養護教諭の養成を目指しています。」とある。

以上のように，各学部はそれぞれの専門性を活かしつつ地域や時代に求められる教員を育成するために，教員養成の理念と目的を独自に定めている。

Ⅳ　「水曜倶楽部」の役割と利用の流れ

前述のような各学部の特色ある教員養成の理念・目的を踏まえ，教師教育研究センターは，教員養成の質保証のための役割を担っている。その教師教育研究センターが運営する「水曜倶楽部」では，他学部生が早い段階で教員を目指す熱意と適性に気づく環境を提供し，進路を自分で選択し，教員を目指すための様々な学びや教員採用試験対策を提供する窓口としての役割を有している。

開放制課程においては，教育学部に比べて教職に関する学びが少ない点が弱みとも言えるが，専門を深く学んだ教員が学校現場で教えることによって，「学ぶことの面白さや喜び」や「専門性の片鱗」を生徒に伝えたり感じさせることができる強みを他学部生に強く自覚させることが大切である。他学部生の中には教育学部の学生に比べ「学習面で焦りを感じている」学生も見受けられるが，「教科の専門を深く学んだ教員になることの意義」を理解させることは肝心である。

他学部生は，教育学部のように同じ教職志望の仲間達と自然に教育問題についての関心や教育観を身につけながら切磋琢磨できる状況ではなく，「教職に関して深く学んでいない」不安を抱えながら１人又は少人数で学ぶ場合が多い。そこで，身近な教職関係の窓口である「水曜倶楽部」での様々な情報提供や交流が大切となってくる。

「水曜倶楽部」は，学部・学年に関わらず教職を志す学生は誰でも参加が可能であり，教職相談あるいは「教職カフェ（懇談会）」に参加することで，「教員になるために何をしたら良い

のか」という不安を軽減する。そして，同じ教職を志望する学生や実務家教員等と交流することにより，教職への熱意や適性について卒業生（教員）や教員採用試験に合格した先輩，熱意のある教職仲間と比較して，自分を客観的に見つめることになる。また，意欲のある学生は，教育学部主催の島根大学未来教師塾や教員採用試験対策セミナー等教員採用試験対策に関する様々な情報，「水曜倶楽部」の各種「教職カフェ」や模擬授業，学校訪問等の企画，教員採用試験対策のテキストブック等を紹介されることにより，教員を目指すために自分が興味のある活動や学びに積極的にチャレンジするようになっている（図２）。その過程の中では，教師への適性や熱意が高くないことに気づき，違う進路を選択する学生もいるが，教師には熱意をもって研究と修養を積むことが求められることを考えると，このことは否定されるべきではないだろう。

活動形態については，教職相談や自己分析ワークシートなど個人参加の形のものもあるが，教育学部の研究室のような雰囲気作りも意図し，テーマを設けて月に数回開催する「教職カフェ」が中心である。

「教職カフェ」では，教員採用試験対策の塾のようなあり方ではなく，教職全般に関して学生の主体的な姿勢を育てることに力を入れている。水曜倶楽部を開設するまでは，このようなサポートは充分ではなかったであろうが，昨今の教員採用試験倍率の高さや即戦力を求める教育事情の中で開放制課程における学生への支援は必要な部分もあり，可能な限り学生の主体性を大切にしたサポートを心がけている。

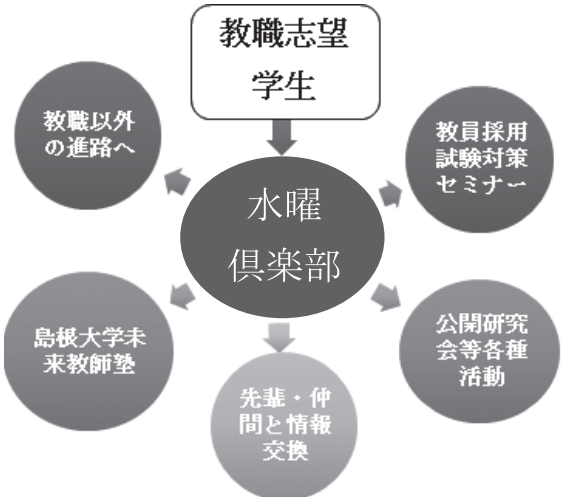
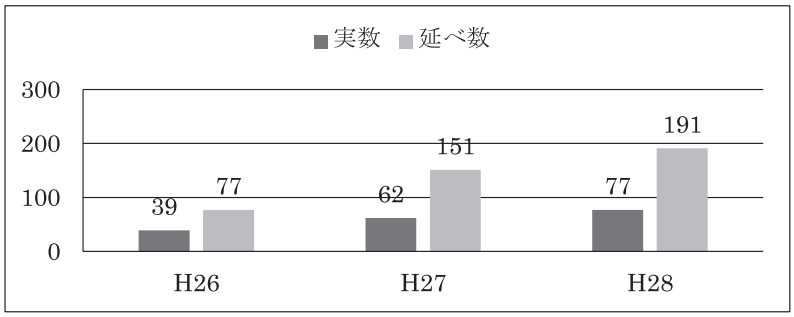


図２　「水曜倶楽部」利用の基本的な流れ

Ⅴ　「水曜倶楽部」への参加状況

（１）参加人数

開設時の平成26年７月から，３年間実数及び延べ数は共に増加してきている（図３）。実数が39人から77人へ，延べ人数が77人から191人と倍増している。



※平成28年度は２月末現在（以下平成28年度は同じ）

図３　参加人数の変化（平成26年度～平成28年度）（人）

参加回数の割合についても，１回のみ参加の割合が減少し，２回以上参加している学生が増えてきている（図４）。平成26年度には，１回のみ参加の学生の割合は，全体の中で７割強ほどであったが，平成28年度には６割を下回った。また，10回以上参加している学生は，毎年１人か２人で極めて少ないが，２～４回の層も徐々に増え，５～９回の層も３人，６人，11人と複数参加の割合が確実に増えつつある。

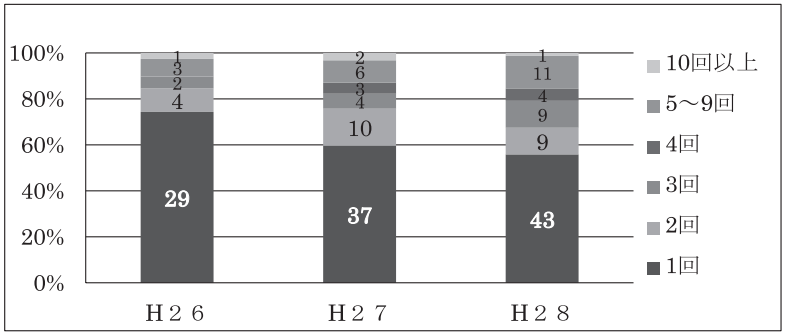


図４　参加者１人における参加回数（人）

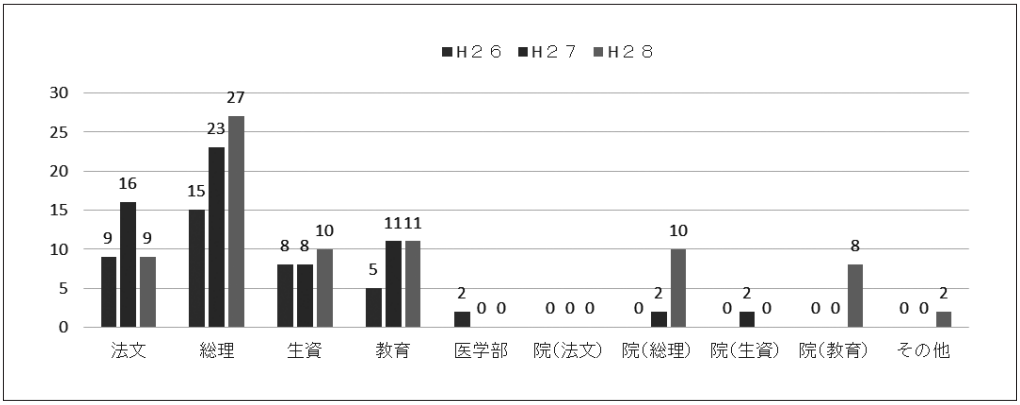
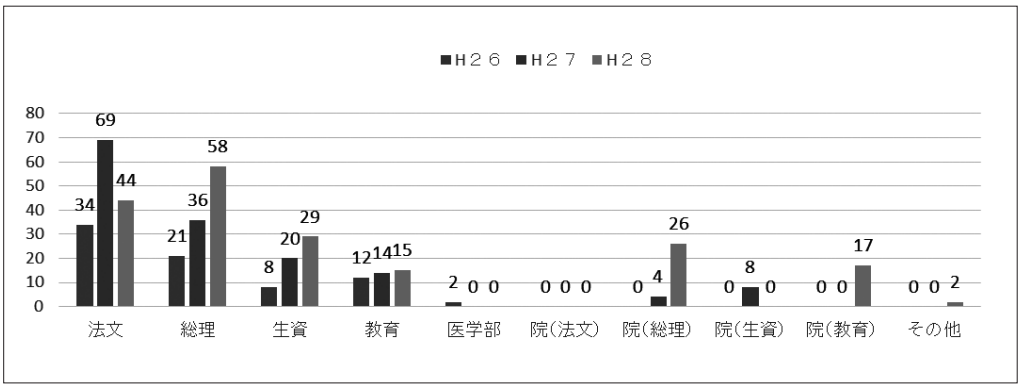


図５　参加実数の変化（学部・院別）（人）



注：「その他」には卒業生（教員，又は講師としての参加者）は含まず

図６　参加延べ人数の変化（学部・院別）（人）

平成26年度から平成28年度の参加人数の変化について，学部・院別にまとめたものが図５と図６である。参加実数を見ると，全体的に総合理工学部の学生が多く，次に法文学部が続き，生物資源科学部と教育学部がほぼ同程度，大学院については，平成28年度に総合理工学研究科と，教育学研究科（主に教職大学院）の参加が目立っている。平成27年度の参加者が極端に多かった法文学部を除いて全体的に少しずつ増加してきている（図５）。

延べ人数を見ると，実数と比較しておおまかには変わりは無いが，実数が少ない割に法文学部の学生の延べ人数が多いことが分かる。これは，平成26年度に３年生だった法文学部の積極的な学生が平成27年度も続けて複数参加していたことによる。生物資源科学部は全体の教職志望者が少ないため参加人数も少なかったものの，平成27年度，28年度は農業科目選択者の熱心な参加が見られた。医学部の学生はキャンパスが出雲市内にあるため，松江キャンパスへの参加は物理的に難しく初年度のみの参加となっている。

（２）教育学部の学生や大学院生等の参加状況

当初教育学部の学生の参加は想定していなかったが，教育学部生への情報提供を頻繁に行うことで，教育学部の学生が教員採用試験合格等のテーマに沿った「教職カフェ」に参加する機会を多く設けることが出来た。他学部生にとって教育学部の学生との交流が刺激になるのはもちろんであるが，教育学部の学生にとっても刺激になったようである。教育学部の学生は，同じ仲間と過ごすことが多く，他学部の教職志望の学生と教職に関しての交流をとても新鮮に感じるようであった。教育学部の学生は「1000時間体験学修」等で教育活動に慣れており，「水曜倶楽部」に参加することによって，率先して雰囲気作りを行い他学部生をリードする場面が多く見られた。

また，平成27年度から総合理工学研究科等を中心とした大学院の学生も参加し，平成28年度には教職大学院の学生も参加，他にも卒業生２名が相談のため来所するなど，在学生や卒業生も含めて幅広い参加が見られた。

Ⅵ　「水曜倶楽部」の主な活動内容

平成26年度７月開設からの主な活動をまとめたものが図７である。

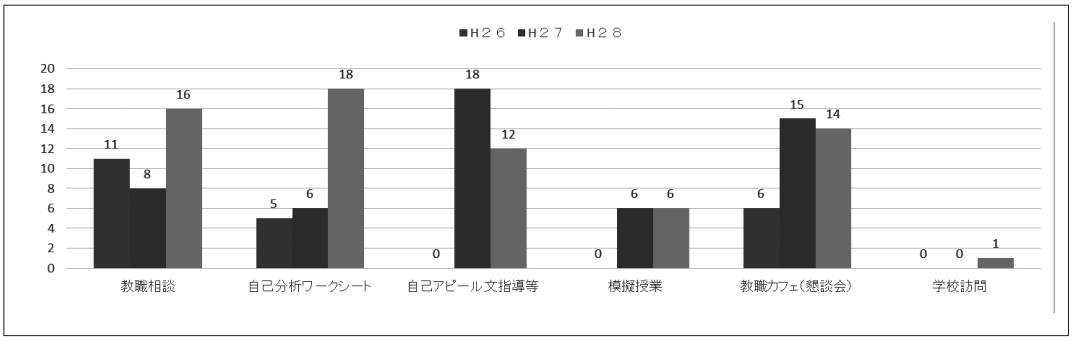


図７　活動回数（平成26年度～平成28年度）（回）

個人で参加する活動としては，教職相談や自己分析ワークシート，自己アピール文の指導がある。教職相談の内容は，教員採用試験の勉強方法に関するものが多い。平成28年度は16件と年間の相談数としては少ないが，担当講師が水曜倶楽部とは別に教育実習事務業務において相談を受けたため計上していなかったものもあり，全体として相談数はもっと多い状況である。また，教員採用試験が近づく頃には自己アピール文の指導や面接指導等の依頼も増えた。

＜水曜倶楽部「自分を見つめる」ワークシート＞

個人対応で特に力を入れている取組みとして，自己理解を深めるための「水曜倶楽部」オリジナルの自己分析ワークシートがある（図８）。このワークシートは１枚に質問が10問あり，５問が自分全般に関する質問，５問が教員関係についての質問である。利用方法は，まず学生がワークシートの質問に回答を記入し，書き終えた後に担当講師や仲間と話し合い，気づいたことを右のメモ欄に，学生本人，または担当講師が書き込むものである。

図８　ワークシートの一例

シートは４種類あるが，№１のワークシートを終了するのに数回を費やすことが多い。長所や短所，理想の教師像を尋ねるため，今までの人生の出来事や学校生活等を振り返り，自己の行動や心理について深く話し合うことが多い。長所や短所についても，なぜそう思うのか，自分では気がついていない部分を担当講師や仲間と話すことにより，初めて気がつくことも少なくない。

例えば，教員関係についての質問では，「今まで出会った素敵な先生はどんな人？」という質問について，自分が出会った先生を思い出し，「その先生のどんなところが良かったのか」を具体的に言葉にすることで，そのような先生に自分もなりたいと思い，そのため「具体的に

どうしたらよいのか」などと自覚するうちに，自分の理想の教師像がおぼろげながらも浮かんでくるようになっていった。

ワークシートの回答は，メモ程度の短いものであり，学生の持つ個性や理想をキーワードとして掘り起こすような作業を行っている。学生本人が教師としての熱意や適性，今後の見通しを見出すとともに，面接対策や自己アピール文作成へのウォーミングアップとしている。

ワークシートを基に話し合いを行う場合，担当講師と１対１のケースが多いが，友人数名と担当講師の場合もある。友人数名と一緒に行う場合は，友人の長所等を聞きアドバイスすることによって自分の長所や弱点が具体的に浮かびあがることもあり，他者理解から自己理解につながる効果もあった。

注意点としては，過去の経験によるトラウマなどを刺激しないように，寄り添いながら慎重に進めたことがあげられる。短所などについても，自分から気づいて前向きに改善策を探すよう努めた。

学生にはこのワークシートの他にも，教員ばかりでなく他の職業の選択も検討できるよう，本学のキャリアセンターの相談も勧めているが，このワークシートを行うことによって，キャリアセンターでの相談を前向きに受ける気持ちが生まれたと言う学生もいた。また，数回ワークシートを実施した後に，一般事務の職種に志望を変更したケースもあった。

このようにワークシートを基に，学生の教師を目指す原点をふり返る作業を行う過程で，熱意を持つ学生たちに職業としての教師の素晴らしさを伝えることは重要であるが，中学校や高校教員の採用試験での現役学生の合格率が低い状況の中で，民間企業等の就職率の高さを考慮すると，教職のみの進路を選択する学生への指導は慎重に慎重を重ねていく必要がある。

＜「教職カフェ」＞

複数の学生が参加する活動としては，「教職カフェ」や模擬授業，学校訪問を実施した。「教職カフェ」は「水曜倶楽部」の活動の中でも特色ある企画であり，教職仲間の他に，実務家教員と交流を持つことによって教育問題についての関心や教育観を養うことなどを主な目的として，教員採用試験合格に向けたテーマを中心に，興味を持ちやすい内容のものを企画した。

教職カフェ開催の様子

教職カフェの中で一番参加者が多い企画は，「合格者体験談」であった。これは教員採用試験に合格した４年生を招いて合格体験談を語ってもらうものである。例年数回実施しているもので参加希望者も多く，身近な先輩の合格体験談を10人までの参加者が丸いテーブルを囲んで話し合う形態をとっている。合格者体験談は講義形式と違い，直接話をしやすいため，１時間程度の予定が毎回数時間に延長になり，いったん終了した後もそのまま希望者が残って合格者に質問するなど参加者の熱心な姿が見受けられた。合格した学生の中には，「この１回で強烈な刺激を受け勉強に熱が入った」という学生もおり，この企画に参加した学生の中から教員採用試験の合格者が数名出ている状況を見ると，モチベーションが高まるなどその影響は少なくないと考えられる（表１）。

表１　「合格者体験談」参加後の教員採用試験合格状況（人）

	実施状況 （開催年月／ゲスト（合格した4年生）の数と内訳）	参加者（合格者以外） 参加人数	参加後の 教員採用試験合格者数
1	平成26年11月　3名 兵庫県（高校・英語） 茨城県（中学校・理科） 島根県（小学校）	4	3
2	平成26年12月　2名 福井県（高校・理科） 静岡県（高校・理科）	5	3
3	平成27年10月　6名 広島県（高校・国語） 岡山県（高校・国語） 岡山県（特別支援学校） 三重県（中学校・理科） 岐阜県（中学校・理科） 愛知県（中学校・理科）	7	1
4	平成27年12月　3名 岡山県（高校・国語） 岡山県（中学校・国語） 島根県（中学校・国語）	5	1
5	平成27年12月　2名 島根県（中学校・数学） 鳥取県（小学校）	5	1
6	平成28年10月　2名 広島県（高校・国語） 広島県（中学校・数学）	9	次年度試験
7	平成28年11月　2名 三重県（中学校・数学） 島根県（小学校）	9	次年度試験
8	平成28年12月　2名 広島県（中学校・社会） 広島県（小学校）	1	次年度試験

また，現職教員である卒業生の好意により，島根大学を来訪した折に懇談会が実現できた。この「卒業生来訪」は，平成26年度に１回，平成27年度に１回，平成28年度に２回計４回実施した。

平成26年８月に実施した「卒業生来訪」では，参加者6名のうち４名が後に行われた教員採用試験で合格した。また翌年の平成27年12月の「卒業生来訪」では，参加者１名が翌年の教員採用試験に合格した。続く平成28年８月には「卒業生来訪」を２回実施したが，そのうちの１回の「卒業生来訪」において，参加者２名のうち１名が教員採用試験に合格という結果になった（表２）。この結果からも，卒業生（教員）からのアドバイスが学生の意識に強い影響を与え合格に導いたことがうかがえる。

表２　「卒業生来訪」参加後の教員採用試験合格状況（人）

	実施状況 （開催年月／ゲスト（卒業生）の勤務地等）	参加人数	参加後の 教員採用試験合格者数
1	平成26年8月 中学校（神戸市・理科）	6	4
2	平成27年12月 中学校（山口県・理科）	1	1
3	平成28年8月 高校（静岡県・理科）	8	次年度試験
4	平成28年8月 高校（岡山県・国語）	2	1（1名は次年度試験）

このように，過去３年間に４回卒業生が来訪しているが，教員として採用された卒業生は全国各地に赴任しており大学訪問はなかなか難しい状況である。そのため，メール等で後輩へのメッセージを依頼し，学生ワークステーションに随時掲示している。また，教員採用試験対策で使用した参考書や資料として寄贈された書籍類を参考書コーナーの一角に置き，学生の教員採用試験対策の参考にしている。身近な先輩が教員として採用されていることは，教職を志望

する学生にとってはとても心強いことであり，この先輩から後輩への「バトン」を途切れることなく伝えていくことが必要と考える。

他にも，同じ都道府県の出身者が集まり，故郷の話や同じ都道府県の教員採用試験対策について語る企画について数回実施した。他学部生は他府県出身者が多いため，この企画を通じて同じ教員採用試験を受ける仲間を知りモチベーションアップを図ることを目的とした企画である。仲間作りには効果的だと思われたが，同じ都道府県出身者が少なく，同じ試験を受ける競争相手と共に学ぶことを敬遠する学生や教員採用試験の詳しい情報入手のみを目的にする学生もおり，仲間での学修にはなかなか結び付かない状況であった。しかし，今後はこのような点を考慮して，様々な情報を交換できる等仲間作りのメリットを呼びかけていきたい。

＜積極的に活動している学生を紹介する企画等＞

開放制課程の個性豊かな人材の特色を活かすためにも，「元気な人から元気をもらおう！」というテーマで，様々な活動にチャレンジしている学生を紹介するコーナーも企画している。例えば，青年海外協力隊に派遣される予定の学生からは派遣前にフランス語で理科の授業を行うために行った努力やそこまでに至る経緯を聞くことにより，他の学生に教えることへの熱意を感じさせることができた。また，平成28年度に留学から帰国した学生を招いて「教職と留学」をテーマに懇談を行い，グローバル化の観点からもチャレンジする精神の大切さを伝えることができた。

＜学校訪問＞

平成28年度の初めての取組みとして，学校現場を知ることの少ない他学部生のために学校訪問を実施した。校種については，見学する機会の少ない高等学校を選んだ。

主な目的の１つ目は授業を見学することであるが，今回訪問した島根県立邇摩高等学校は総合学科であるため，普通科出身の多い学生が様々な授業の様子を知ることができた。２つ目は指定事業等の特別な取組みを視察することであり，特別支援教育の文科省指定のモデル校として特別な取組みが行われていることもあって，特別支援教育について学ぶ機会の少ない他学部生にとって貴重な経験となっ

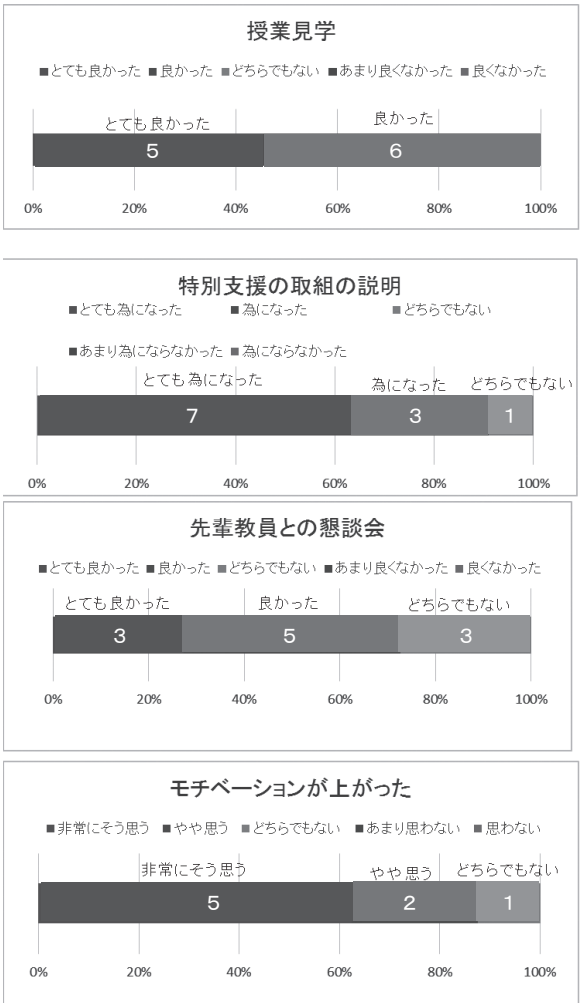


図９　学校訪問アンケート結果（人）

た。そして３つ目は島根大学出身の教員と交流することである。先輩教員が活躍する姿を見ることによりモチベーションがアップし，民間企業で働く卒業生を訪ねる企業訪問のような効果もあった。今回は管理職も含めた教員や，昨年度卒業し「水曜倶楽部」にも参加していた卒業生が講師として勤めており，より身近な先輩の授業を見たり，授業後アドバイスをもらうことで喜ぶ学生の姿が見られた。

この学校訪問終了後アンケートを実施し，参加者12名中11名の回答を得た。（図９）

質問は，授業見学，特別支援の取組みの説明，先輩教員との懇談会，モチベーションが上がったか（教職大学院現職教員は除く）の４項目であり，いずれも概ね好評な結果が出た。

「先輩教員との懇談会」について，他の３つの質問に比べ「とても良かった」が少ないが，訪問時間が短かったため「もっと話を聞きたかった」という要望が多かったためと思われる。

今回は，実務家教員や教職大学院の現職教員学生の参加もあり，他学部生にとっても教職関係者と交流のできる貴重な機会となった。卒業生の近況報告や後輩へのメッセージにおいても「学生のうちに少しでも現場に触れる機会をもってもらいたい」という内容も少なくなく，今後も出来るだけこのような訪問を実施していきたい。

Ⅶ　活動状況の分析と考察

（１）４年生の「水曜倶楽部」の参加状況について

過去２年間に開講された「教育実習に係る事後指導」において，「教職に関する意識調査」（記名式）の中で，「水曜倶楽部」への4年生の参加状況や教員採用試験受験状況等について調査した。（平成27年11月15日，履修者119名，平成28年12月13日，履修者103名）

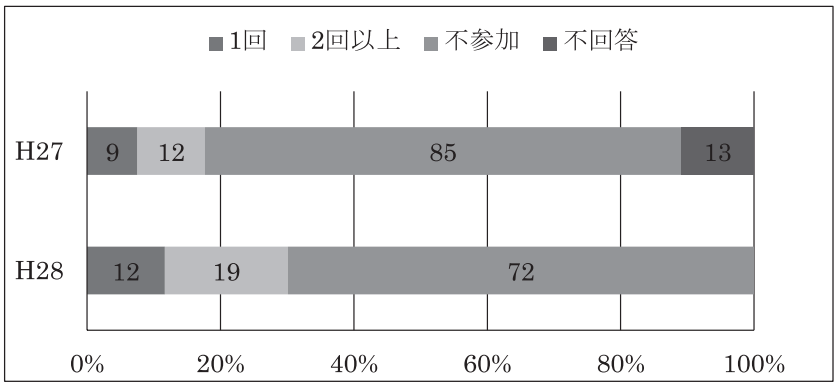


図10　「水曜倶楽部」参加状況（４年生）（人）

平成27年度と平成28年度を比べてみると，１回と２回以上を合わせた参加者は平成27年度が21人，平成28年度が31人と増加し，４年生の３割が「水曜倶楽部」に参加している状況になった（図10）。ただし平成27年度の４年生は，法文学部の学生を中心に他の学生を巻き込む形で積極的に行動の場を広げていく好事例が見られたが，平成28年度は「水曜倶楽部」の参加者が増えたものの，４年生の多くは少人数単位で参加しており，前年度ほど参加者同士のまとまりは見られなかった。

（２）公立学校教員採用試験合格状況について

「水曜倶楽部」開設後の４年生の２年間の教員採用試験合格状況をみると，二次合格者は平成27年度は８人であったが，平成28年度は受験者数が48人と減少（前年比－17人）していることもあり３人という少ない結果であった（表３）。

表３　教員採用試験合格者（平成27年度・平成28年度）（人）

	H27			H28		
	参加	不参加	合計	参加	不参加	合計
教員採用試験受験者	17	48	65	22	26	48
一次合格者	10	7	17	6	9	15
二次合格者	8	0	8	3	0	3

ただ平成28年度については，教員採用試験受験者の中に占める「水曜倶楽部」参加者の数は22人と平成27年度よりも増えている。平成27年度は熱意のある少数が集まり頻繁に参加することで合格率は高かったが，平成28年度は「水曜倶楽部」が広く知られるようになったため、参加者が増えて裾野が広がったことが合格率を下げた面もあると考えられる。

（３）意識調査（４年生）について

平成28年度の４年生に対する調査の中で，「水曜倶楽部」参加後の意識の変化について，「教職に対する不安感が減少したか」，「モチベーションがアップしたか」，「教職を目指す仲間との交流が広がったか」，「教員等の異なる世代と接することに苦手意識がなくなったか」「水曜倶楽部」に参加した感想」の５つの設問について意識調査を行った（図11）。

＜１　不安感の減少について＞

「非常にそう思う」は1割強しかなかった。その理由は「仲間と同じ心情であることがわかったため」，「情報が入手できた」といったように「水曜倶楽部」に参加することで当初の不安感は薄まったが，逆に教員採用試験対策の厳しい現状を知ったために，準備が遅れていることを痛感したために「新しい不安感」が発生したようである。

＜２　モチベーションアップについて＞

「モチベーションがアップしたか」については，やはり，モチベーションがアップした学生が多い。「非常にそう思う」と「やや思う」を合わせると８割強になる。そのうちの「非常にそう思う」が４割を超えている。「水曜倶楽部」に参加して一番強く感じる部分であると言えよう。「どちらでもない」，「あまり思わない」と思う学生は５名いるが，１回参加しただけなのであまり気持ちに変化がなかったようである。内容によっては，１回でもモチベーションが上がった学生もいるため，一概に言えないが，１回の企画の参加者は多くても10人程度であるため，全員に目を配り雰囲気に入りこめていない学生に声かけをするなど，丁寧な対応に努め

たい。

＜3　仲間との交流について＞

教職を目指す仲間との交流も，「水曜倶楽部」の大きな特色のひとつである。「非常にそう思う」と「やや思う」が約7割と，前2問と比べやや低い割合になった。この設問では「あまり思わない」「思わない」が7名であった。1回しか参加していない場合は，すぐに仲間との交流までいかないようであったが，学生によっては1回の参加で意気投合しすぐに連絡先の交換を行ったり，自分達で勉強会を始めるグループもいた。いつも一人でいる学生には，スタッフからも声掛けをすることによって仲間との交流のきっかけを与えることも行いたい。

＜4　教員等の異なる世代と接することの苦手意識について＞

この項目は，他の項目と違い逆の結果が出た。「非常に思う」と「やや思う」は4割にも満たなかった。他学部生は世代間のコミュニケーション，特に年齢層の高い人に苦手意識をもっていると予想していたが，教職志望の他学部生は「最初から苦手意識がない」と思っている学生が多いことがわかった。教職志望の学生が異なる世代と接することに苦手意識がないのであれば，よりコミュニケーションが円滑にいくよう経験値を上げる機会を設けていくことを検討する。

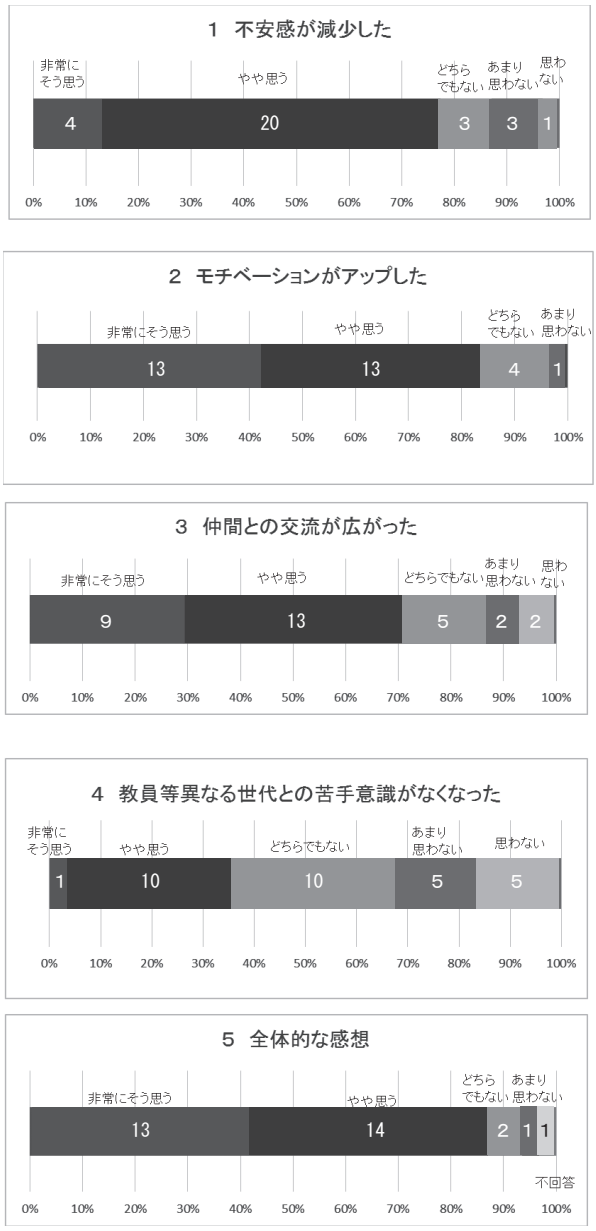


図11　意識調査（4年生対象）（人）

＜5　全体的な感想について＞

全体的な感想では，「とても良かった」及び「良かった」が90%近くあった。この意識調査は記名式であるため否定的な意見は回答しにくい面があるが，「どちらでもない」が2名，「あまり良くなかった」が1名あった。今後少しでも学生が望む内容を検討する予定であるが，サポートに熱心になるあまり学生の自発的精神の芽を摘むことのないよう，学生の主体性を尊重し，個に応じた支援を心がけて行きたい。

Ⅷ　成果と課題

（1）成果

「水曜倶楽部」の成果として，まずこの3年間で参加者が増加し，当初想定しなかった教育学部や医学部の学生，さらに大学院や教職大学院の学生，教員を目指す卒業生と幅広い参加があり参加者の裾野が広がったことがあげられる。教職を目指す仲間との交流の場ができたことで，「共通の居場所」ができ安心して学び，仲間と共に切磋琢磨できる環境ができたのではないだろうか。

教員採用試験の合格状況については，「水曜倶楽部」開設後の平成27年度及び平成28年度ともに合格者の数としては多くはなかった。特に平成28年度は受験者総数も減少し，合格者も少ない状況であった。しかしその中で，注目できる点は，開設後2年続けて合格者全員が「水曜倶楽部」の参加者であったことである。「水曜倶楽部」に参加していない学生で一次試験に合格した学生は一定数いるが，最終的に合格した学生はいなかった。より教職志望の高い学生が自ずと「水曜倶楽部」に集まったとも考えられるが，前述の意識調査に見られるように，「水曜倶楽部」に参加することで教職へのモチベーションが高まったことは成果の一つと言えるだろう。義務や強制ではなく，心から「教師になりたい」という内発的動機付けが高まることにより，様々な活動に積極的に取り組む姿勢が見られた。

「水曜倶楽部」に参加した学生の中で，教員採用試験に合格した学生には「教員を目指すために自ら考え行動している」傾向が見られたが，「水曜倶楽部」を通じて，モチベーションが高まることでさらにその傾向は強まったものと考えられる。このように自発的に行動し「水曜倶楽部」に集まってきた学生に対し，「水曜倶楽部」がさらに仲間作りなどのモチベーションを高める機会や教職関係の情報を提供し，励まし見守ることによって教職への道を切り開いたことは「水曜倶楽部」の大きな成果と言えるのではないか。

（2）今後の課題

ア　「教職カフェ」等の日程調整

「水曜倶楽部」は，主に授業のない水曜日の午後に実施しているが，ゼミやサークル活動等の定期の予定が既に入っている学生も少なくない。そのため，水曜日午後の違う時間帯の開催も検討している。また，水曜日以外の土曜日・日曜日の開催も実施したこともあるが，かえって参加者が少ない結果となった。企画によっては，ある程度参加者が決まった段階で日程を絞って開催していく方法を用いていく予定である。

また，モチベーションが保ちにくいという他学部生のために，全員が参加可能なテーマの懇談会を月に1回程度開催し，モチベーションの維持や確認ができる定例会のようなものを検討している。

イ　大学院生へのサポート

総合理工学部を筆頭に，大学院進学後教員採用試験を受験する学生も少なくない。専門を究めた教員を養成していくという意味でも，教職に関係する授業がほとんどない環境にいる大学院生の支援の必要性も大きい。大学院生は教育実習を既に終了し教職への見通しをある程度持っ

ていると思われるので，効果的なサポート次第では合格者を多く出すことができ，学部生と共に切磋琢磨することでお互いに良い影響が出てくるのでないかと考える。

ウ　教育学部・教職大学院等との連携

教師教育研究センターは，教育学部の附属組織であるため教育学部と連携し情報が得やすいのが強みである。「水曜倶楽部」では，教育学部で実施している「島根大学未来教師塾」や就職支援室，「教員採用試験対策セミナー」等の既存の各種教員採用試験対策や就職支援室作成の「教員採用試験受験テキストブック」を紹介し，好評を得ている。

また、他学部を主にサポートしている「水曜倶楽部」の側からも，教育学部の学生に還元できるものを検討している。今後，教育学部の学生や教職大学院の学生が参加する機会は増えていく傾向にあるため，模擬授業等を通じてより良い相乗効果が生まれていくよう努めていく。また，キャリア教育の観点からも本学キャリアセンター等への相談も勧めることにより，教職一辺倒の指導に片寄るのではなく，学生の適性に応じた柔軟な進路指導を可能としたい。

エ　卒業生とのネットワーク作り

３年間の活動により，卒業生（教員）との少人数での交流が在学生への教職へのモチベーションを高める効果があることが分かった。

卒業生との交流を深めるためにも，在学時からより多くの学生と「水曜倶楽部」を通じて関わり，教員採用試験合格状況や勤務学校の情報の提供や卒業生との懇談会や学校訪問につなげていく。また，「水曜倶楽部」のホームページをリニューアルし，「水曜倶楽部」の活動状況を掲載するとともに，後輩へのメッセージを入力するためのフォームを作成することも予定している。今後は，卒業生にとっても「水曜倶楽部」が「共通の居場所」となるような役割も検討していきたい。

Ⅸ　結び

「水曜倶楽部」という名称に込められた意味は２つある。一つは「水曜日に開催する」こと，もう一つは，「クラブ」という仲間作りである。「倶楽部」という漢字を使用した理由は，「楽しい」という願いを込めている。教職志望の他学部生は，専門の勉強や様々な活動の他に教職の授業が増えて多忙になる上，中学校・高等学校の倍率が高い教員採用試験を数年後に控えているため，多くの学生は「不安な」気持ちで過ごしている印象を受ける。しかし，本来学ぶということは好奇心をもって探求するものであろう。「水曜倶楽部」に参加する学生はその気持ちをなるべく持って学んで欲しいという思いがある。

また，年に数回発行している「水曜倶楽部」の情報紙「水曜倶楽部通信」は，レインボーカラーの色調にしている。「多様な個性を出してほしい」という意味を込めている。

「数学が好き」，「国語が好き」など，学ぶことの本来の楽しさや面白さを追求して専門を学んだ開放制課程の学生の，個性豊かで魅力的な，明るくたくましい人材を送り出すための支援をこれからも続けていきたい。

参照ホームページ

国立大学法人島根大学「教職課程における教員養成情報　教員養成に対する目標及び計画に関すること」
http://www.shimane-u.ac.jp/introduction/information/education_announce/kyousyokukatei/
（参照日：2017年 3 月18日）。